

滝の仁作の庭のシブガキにも若々しい葉が萌え、それがだんだん黒ずんで、花ノ根にも夏がきた。

梅雨の間の、盛夏のように暑いある日、カミノイリの一人の少年が、シモの谷川で水死した。八郎の教え子の一人であったその少年は、谷川のハヤを追っかけるうちに筋硬直を起こして倒れ、そのまま溺死したものである。夏とはいえ北の山ふところに源流を持つ谷川の水は、まだかなり冷たい。風の暑さと水の冷たさのいちじるしい差がこうした悲劇を生んだといえるかも知れない。

ら、予算難といわれれば引っこむほかはなかったのだ。おまけに小原村議や多山村議も口をそろえて、悲観的な見通ししかしなかったのだから、花ノ根の住人たちはシモに橋はかからないものと固定観念を抱き、あらためて架設を提唱する者さえいなかったのである。長老会の方は徳左右衛門にまかせて、八郎は若者たちにこの案を話した。

「みんなで力を合わせれば、石造りの潜水橋くらしいくれるのではないでありましょうか」この信頼すべきリーダーの意見に反対はなかつ

八郎は徳左右衛門に、シモにも一つ橋をつくってほしいと希望した。

「いままで計画が出ていつでも予算がないので沙汰やみになっていたので、こんども庄平さんがどういうか」徳左右衛門は首をかしげた。八郎も首をかしげた。庄平がこの花ノ根きつての名士であることは知っているが、どうして橋をつくることをしづぶるか、八郎には解せなかった。庄平のノゾキ趣味など、本人以外には誰ひとり知る者もなかったか

た。橋の資材の石材は長老たちの拠金に頼り、架橋の労力は自分たち若者が勤労奉仕すればいいという話にまで進んだのに、長老たちの結論が出なかった。

「いま自分たちの金と労力で橋を造りなどすれば、これからは花ノ根の土木事業には村費が出なくなるかもしれないのであります。何をやるにしても自分たちのふところを痛めるほかなくなつては、重大な危機を招来するのではないでしようか」

多山健吾がこういうと、庄平もいう。

「むかしのように花ノ根が一つの村であった折りなら、私は何をおいてもこの橋をつけることに賛成したでありましょう。花ノ根が自費で橋を造るといふことは、とりもなおさず自分たちが出している村民税の地方への還元、つまりは公民権の行使を放棄するのにとしいのであります。村のための橋は、あくまで村の金でつくるべきであります」

だが、そのためには、どうしても予算難というありまして、この際、村長も首を横に振ることはないでありますように」  
徳左右衛門は主張した。

「初瀬さん、あなたはかつて一度も村政に参加したことがない。そうした甘い見通しを立てるのは、いまの村長のずる賢さを知らないからであります。それとも、初瀬さん、あなたが橋をつくる費用を全額あなたのふところから支払ってみる決意があるのでありますか」

ジャガイモ二貫をもって、榎の茂太郎を逆上

カベにぶつかってしまったのであるが、庄平はそこまではいわなかった。

「私も元村長として、現村長はじめ村議会議員諸君に極力折衝はしてみるつもりであります。村政という大局的な立ち場からすれば、やはりシモノカミの橋のコンクリート化が急がれるであります」

「それは確かにその通りであります」  
恵吉村議もいったが、あとのことばは出なかった。

「だが、庄平さん、ことは人命に関することです。させた徳左右衛門である。庄平からこういわれると、軽蔑された腹立たしさよりも出費の方が恐ろしかった。

長老会議で埒があかなかったことは、八郎たち花ノ根の青年層を刺激した。自分たちが労力まで出そうというのに、そうした奉仕に対して長老は報いようとしなない。

八郎たち代表三人はカワラ木のいちばんシモにある村役場へ押しかけ、村長に陳情したが、村長は庄平たちの見解を質して、

「まことに残念なことでありますが、三野氏の  
いわれるとおり、村としては大川の橋の方が急務

であります。予算も少ないことでありますので、  
現在五カ年計画で資金蓄積をいたしておりますの  
であります」

村長は口の真ん中にくわえた安たばこの  
烟をふかふかと金魚のように吐き出し、八郎たち  
の訴えをまるで煙にまいてしまった。

三野庄平のいる花ノ根にいくら村の公金を支出  
したところで、自分の村長の得票にどれほども

つぎ出してきて、それを谷の真中にぶち込みま  
しょうか」

もう一人はちよつと乱暴なことをいい出した。

「まあ、そのように急いでしまうことはないの  
であります。村の老人たちも担ぎ出すことがもつ  
ともいい方法であるからであります」

八郎は老人たちという表現したが、実は庄平  
が橋をかけることの困難さをしきりに主張する  
ことによつて、自分の元村長であることの権威を  
示そうとしていることがわかっている。庄平を

結びつくものでないことを、この古ムジナはよく  
知っていたのである。

(一一)

「八郎さん、こうなつては、私たちにどのよ  
うなことができるではありませんようか」

村役場からの帰り、大川シモの橋の手前で、八郎  
と同行していた代表の一人が当惑しきつたよう  
にいうのである。

「別に、りっぱな石でなくてもいいのでありま  
すから、そうであるなら裏の山から大きな石をか

頂点とする花ノ根のボスたちの切りくずしがで  
きるならば、花ノ根はもつともつと明るく近代化  
されるに違いない。

二度目の長老会議は、架橋推進派と悲観派の  
二つに分裂してしまった。

宮司、東雲初太郎氏は、八郎たちの勤勞奉仕に  
感動した。戦時中のなつかしいことばであつたこ  
ともあるにはあつたろうが、これまで、若い者た  
ちを扇動してコーラスとかフォークダンスばかり  
に熱をあげていると思つていた八郎を、まんざら

見捨てたものでもないと思なおす。

桑田吉次は、チャチな潜水橋などをつくるよりも、木をつかって壮大な太鼓橋をつくろうといったものだ。木だけは豊富なこの花ノ根なのだから、山持ちたちがわずかずつ出し合っても雄大なものができることは確かだ。その橋を鮮やかな朱色に塗って、欄干の中央部に輝かしいスズラン灯を立てよう。もし出し合った木材が余れば、橋の上にお城のような屋根をつけて、雨が降っても濡れないようにしよう。

「何をどうすればいいというのでありますか」

これには同席していたみんなが笑ってしまった。吉次の際限もなく広がっていきそうな話に、それまで噛みつぶしていた笑いが、正太の反駁で爆笑してしまったのである。

ひとしきり笑ったあとでは、吉次の提案した「材木を出し合って」という建設的な考えまでころり忘れてしまう。もしくは忘れたふりをしてしまう。

中村ノも橋をかけることにあまり積極的ではなかった。娘二人からせつつかれて、賛成派には

どうも吉次のいうことは現実的ではない。みんなでも木材を出し合ってというまではよくわかるのだが、しゃべっているうちに空想的、夢想的になっていってしまう。本家の吉次に対して、分家の正太は反論する。

「吉次よ、とてつもないことをいうものではありません。橋の上だけに屋根をつけて、橋だけが雨に濡れなくともどうなるものでもないではありません。そればかりではありません。お前の家は山が多から木も出せようもしましようが、私の家な

まわっていたが、だいたい、店へはお客がきてくれるものであったし、シモノカミとシモノナガレの間に橋ができようと思えまいと、あまり関係はなかったからである。彼女の店はシモノナガレもいちばんシモノに近いあたりにあったのだ。

この夜も埒があかなかった。

その夜、若い者たちは初瀬徳左右衛門の家へ集まり、もう長老に頼ることはやめて、まず自分たちで何かを始めようという相談を始めた。山から大きな石を担ぎ出してきて、谷川の真ん中へ投げ

こもうではないかという意見さえその可能性をま  
じめに討議した。

徳左右衛門は、こうした若者の意思を長老たち  
に反映させるために、もう一度待つてほしいとい  
った。

三野庄平は、徳左右衛門が八郎と近づくことに  
よって若者たちの人気を博し、その先頭に立ち  
はじめているのを知って、自分の座がゆるぎだす脅  
威を感じた。

(以上8月27日放送分)